

緒言

ふるくから言われるように、大和はまさしく国のまほろばである。このことは、今夏、急逝された故小林剛博士のあとをうけて研究所に着任してから、わたくしが、日々心根に感じているところである。それは単に、風光のやわらかさや美しさだけによって、いうのではない。われわれの祖先の、文化を創造し持続した志への共感によって、いうのである。その志こそは、この地につたわる数々の文化遺産をとおしてみえる文化のいとなみであり、かつは大和のたぐいえない風土を育てあげた力でもある。大和は、そうした文化と風土とのすぐれた調和によって、いまもなお、国のまほろばである。われわれの研究所が目的とするところもまた、その志なり調和なりへの共感にもとづくことは、いうまでもない。

しかし、今日、研究の仕事をおしすすめることは、なかなか容易ではない。一つはわれわれの心構えとして、日々のたゆまない精進が必要であることはいうまでもないが、一つには現代社会のほげしい変動のなかで事を処さなければならぬからである。その変動は、このすばらしい歴史的調和を破壊しざるような勢をしめすことすら屢々ある。われわれの研究所の責務は、そのような変動のなかにあつて、文化と風土との歴史的調和をとおし、父祖の志を正しく理解し、更にこれを持続する方向へ文化を手引きすることであらう。

ここに、『奈良国立文化財研究所年報一九六九』として、昭和四十三年度における事業の概要を報告するはこびとなったが、本研究所は創立以来二十年に満たず、その歩みも必ずしも大きくない。しかし、つねに若々しい気概をもって、一步一步、確実な歩みを続けていきたいと所員一同考えている。

関係御各位の、日頃の御支援を感謝するとともに、一層の御理解を願ってやまない。

昭和四十四年十二月二十七日

奈良国立文化財研究所長

松 下 隆 章